

【講演会等報告】

先住民アーティストの誕生—アボリジニ芸術の誕生—
窪田幸子氏 講演会

中 田 篤

開 催 日 : 2010年5月30日(日) 15:00~16:30
開催場所 : 北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟 W409 室
講 師 : 窪田幸子氏 (神戸大学大学院国際文化学研究科教授)
主 催 : 北海道民族学会・北海道立北方民族博物館
後 援 : 北海道大学アイヌ・先住民研究センター

アボリジニの社会変化、国家における先住民の位置づけなどを対象とした研究を進められている窪田氏をお招きし、アボリジニの美術工芸の変遷とその社会的影響をテーマにお話しいただいた。講演には北海道民族学会会員のほか、一般の参加者もあり、講演後には熱心な質疑が交わされた。以下に講演の概要を紹介する。

* * *

オーストラリアの先住民アボリジニは、約200年前のイギリス系の白人の入植により、文化的・社会的に大きな打撃を受けてきた。しかし1970年代のアボリジニ美術工芸品産業の誕生以降、その評価の高まりに伴ってオーストラリアにおけるアボリジニのイメージは転換し、アボリジニの権利回復も進められてきた。そして現在に至るまで、アートはアボリジニ社会を変える原動力となっている。

＜アボリジニ・アートの曙—1970年代＞

現代のアボリジニ・アートは多様だが、アーネムランドの樹皮画と中央砂漠のアクリル点描画はその代表的なものである。こうしたアボリジニ・アートは、1971年のオーストラリア政府によるアボリジニ・アート局の創設を契機に市場にのった。政府はアボリジニの生活改善のため、各地共同体にアートアドバイザーを派遣し、美術工芸品産業の育成を進めたのである。

1959年に建設された中央砂漠のパパニア村では、1971年にアクリル絵画の制作が始まった。本来この地域のアボリジニ絵画は、伝統的な儀礼のために身体や地面に描かれ、その終了とともに失われてしまうものであった。しかし白人教師の助けによって、アクリル絵の具とキャンバス地を利用した絵画が商品化された。

一方、1957年に建設されたアーネムランドのマニングリダ村では、1963年よりアームストロング牧師が樹皮画制作を奨励した。1968年には美術工芸品センターが建設され、その後代々の白人アドバイザーによって、美術工芸品の多彩な産業化が試みられた。

アボリジニの美術工芸品の産業化において、政府から派遣された白人アートアドバイザーは重要な存在だった。



彼らはアボリジニの精神性を理解しつつ、その作品を市場で売るという困難な問題の解決を求められる重圧のかかる立場に置かれていた。また、特に初期には、アボリジニの村は電話も通じないような僻地であり、彼らの孤立感は大きかったものと思われる。アドバイザーたちの努力により、アボリジニの美術工芸品が産業として出発したのである。

こうした動きに対し、アボリジニ側もさまざまな形で対応した。本来アボリジニの絵画は、部外者には公開できない秘密を含むなどさまざまなタブーを持っており、市場を流通する商品とは相容れない性質のものであった。そのため、産業化するに当たって、特定の文様だけを公開したり、点描で文様の一部を隠すなど、アボリジニの論理と市場の論理との調整が行われた。

当初アボリジニの美術工芸品は、西欧の素材を使う手法に対する「本物ではない」といった批判や芸術ではないとされ、評価も低く、みやげものとして流通された。価格も 1974 年の時点では、アクリル点描画がせいぜい 300 豪ドル (約 25,000 円) ^{註)} 程度だった。

＜公立美術館、博物館の変化—1980 年代＞

1970 年代まで、アボリジニの作品を収集する博物館・美術館は稀だった。例えばオーストラリア国立美術館では、1976 年の準備室開設から 1982 年の開館まで、一部の寄贈資料を除き、アボリジニ・アートの収集はほとんどおこなわなかった。

しかし、1984 年、同館にアボリジニ専門部門が開設されると状況は一変する。専門の学芸員や予算が確保され、その後は年間 100 点程度を収集するようになった。同時期に他の美術館・博物館もアボリジニ部門を開設し、積極的な収集活動を開始するとともに、既存のアボリジニ展示のリニューアルやアボリジニ学芸員の雇用なども盛んにおこなわれた。こうした変化は、オーストラリアの移民 200 年記念、連邦成立 100 年などの国家の事情と関係していた。

美術館・博物館による作品収集は、アボリジニ・アートの評価を高め、アボリジニ美術工芸品産業の安定的発展を促した。そして伝統文化を背景とするアボリジニ・アートは、次第にオーストラリアという若い国家のアイデンティティの一部として認識されるようになっていった。

この間、アボリジニ側の状況も変化した。大規模な展覧会への出展に伴い、アボリジニの作家が都市や海外へ行く機会は増え、収入は増加し、作品の芸術的評価は高まった。こうした経験を通じ、アボリジニ側の西欧の絵画文化や展覧会という絵画公開のあり方に対する理解が深まり、作品スタイルが多様化するとともに、アボリジニ側のタブーに抵触しない、あるいはタブーと妥協した制作・表現方法が生み出された。

＜国際的市場へ—1990 年代＞

1989 年、アメリカで開催されたアボリジニ・アートの作品展を契機に、アボリジニ・アートに対する国際的評価が高まり、その後次々と国内外での展覧会が開催され、収集家や投資家が出現した。1996 年以降、サザビーズ、ドイチャー＝メンジス、クリスティーズ＝デニソンといったオークション会社が、次々とアボリジニ・アート専門のオークション部門を立ち上げた。サザビーズの売り上げ総額は、1998 年の 330 万豪ドル (約 2 億 6400 万円) から、2007 年には 820 万豪ドル (約 6 億 5600 万円) へと上昇し、この間の落札率は 7～8 割という高い値を誇っている。1990 年代は 25 万豪ドル (約 2000 万円) 程度だった最高落札額も、2007 年には約 238 万豪ドル (約 1 億 9000 万円) に達した。

＜おわりに＞

1970 年代～1990 年代にかけて、様々な仲介者との関わりを経て、アボリジニの美術工芸品は、みやげものからオーストラリアの国家的シンボルへ、そして国際的な芸術となっていった。

それに対応し、アボリジニ側でもタブーとの調整、絵画スタイルの多様化、女性画家の参入、抽象的表現の増加など、アボリジニ側の論理と市場原理との妥協を図っていった。

アボリジニ・アートの変遷をたどってみると、そのあり方は、主流社会の論理に一方向的に飲み込まれるのではなく、常にアボリジニ側の論理である大地との独自のつながりを維持しつつ、神話世界とアートワールド（美術市場に関わる世界）を往還していると言えるだろう。

注) 文中の金額はすべて1豪ドル=80円で換算した。

(なかだ・あつし/北海道立北方民族博物館)